

伊吹町内遺跡調査概報 I

伊吹町曲谷所在 起し又遺跡・ムカイラ遺跡

伊吹町甲賀所在 大平遺跡

伊吹町大久保所在 長尾寺遺跡（後谷墓地）

1993. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町内遺跡調査概報Ⅰ

- 伊吹町曲谷所在 おこしまた 起し又遺跡・ムカイラ遺跡
- 伊吹町甲賀所在 おおひら 大平遺跡
- 伊吹町大久保所在 ながおじ 長尾寺遺跡 うしろだにぼち (後谷墓地)

1993. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

正誤表

文中に間違いがありました
ので、以下のとおり訂正をお
願います。

3ページ1行目

藤子川→藤古川

序 文

姉川は伊吹町甲津原の北にそびえる新穂山（1,067m）を水源とする全長約53kmの河川です。その水量は滋賀県下で最も多く、流域に生活する私たちは、現在まで姉川からさまざまな恩恵を受け、ときに自然の猛威に震えあがりました。

いま、町北部の曲谷地先で姉川ダムの建設が始まりました。このダムにより洪水調節と、水不足の時に備えた流水の正常な機能の維持が可能となるようです。関連して建設される主要地方道山東本線線の付替道路は、冬期の交通確保に威力を発揮し地元区発展に寄与することが期待されています。また、ほ場整備事業も始まります。

そのために、町の北部地域は日毎にその姿を変えていきます。姉川ダム事業により当地域の多くの文化遺産に脚光があたり、逆に地下に眠る埋蔵文化財は、その性格上気付かれないままに消えてしまう恐れがあります。幸い起し又遺跡では縄文時代の土器が調査によって発見され、北部地域における私たちの先祖の足跡が予想以上に古いことが確認できました。

本書はほ場整備事業に関連する曲谷・甲賀地区の確認調査の記録です。十分な成果が上げられませんでした。今後とも開発と文化財保護とのトラブルを未然に防ぎ、地域のために活かす文化財保護行政推進にご理解をいただきたいと思ひます。

併せて伊吹町大久保所在の長尾寺遺跡の発掘調査の概要も報告いたします。

調査の実施、報告書の作成に対しあたたかいご指導とご協力を賜りました。関係機関・各位に厚くお礼申し上げます。

1993年3月

伊吹町教育委員会

教育長 石河 竹二郎

例 言

1. 本書は、文化庁・滋賀県の補助を受け、平成4年度国庫補助事業として実施した町内遺跡の調査概要をまとめたものである。
2. 本調査は滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受けて、伊吹町教育委員会が主体となり、平成4年10月から平成5年3月31日まで実施した。現地調査は、伊吹町教育委員会社会教育課技師高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記の通りである。

調査主体 伊吹町教育委員会 教育長 石河竹二郎

調査事務局 伊吹町教育委員会 社会教育課 課長 堀内安夫
課長補佐 篠原 渡

調査作業員 森下豊一 坪井留義 柏 学 宮川満子 瀧澤康仁
柏 隆一 森 幸子 山田ゆかり 福永 卓

4. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記作業員のうち、宮川・瀧澤・柏・森・山田・福永でおこなった。
5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言等種々の協力を得た。記して厚く感謝の意を表す次第である。

曲谷区長・甲賀区長・大久保区長・曲谷地区ほ場整備組合・惣持寺・松井捨之進
兼康保明・葛野泰樹（滋賀県教育委員会）・宮崎幹也（近江町教育委員会）

中井 均・土井一行（米原町教育委員会）・桂田峰男（山東町教育委員会）

6. 本書の執筆・編集は高橋がおこなった。

目 次

I. 伊吹町曲谷 起し又遺跡（第2次）・ムカイラ遺跡

伊吹町甲賀 大平遺跡

1. 調査の経過	2
2. 位置と環境	2
3. 調査の概要	3
(1) 起し又遺跡	3
(2) ムカイラ遺跡	4
(3) 大平遺跡	4
4. おわりに	8

II. 伊吹町大久保 長尾寺遺跡（後谷墓地）

1. 調査の経過	11
2. 位置と環境	11
3. 調査の概要	12
4. おわりに	17

挿 図 目 次

I. 起し又遺跡（第2次）・ムカイラ遺跡・大平遺跡	
第1図 調査地周辺図（1）	1
第2図 起し又遺跡試掘トレンチ配置図	5
第3図 起し又遺跡試掘トレンチ土層柱状図	5
第4図 ムカイラ遺跡試掘トレンチ配置図	6
第5図 ムカイラ遺跡試掘トレンチ土層柱状図	6
第6図 大平遺跡試掘トレンチ配置図	7
第7図 大平遺跡試掘トレンチ土層柱状図	7
II. 長尾寺遺跡（後谷墓地）	
第8図 調査地周辺図（2）	10
第9図 調査トレンチ配置図	14
第10図 トレンチ1平面図	15
第11図 トレンチ2遺物出土状況	16
第12図 トレンチ1遺物出土状況	17

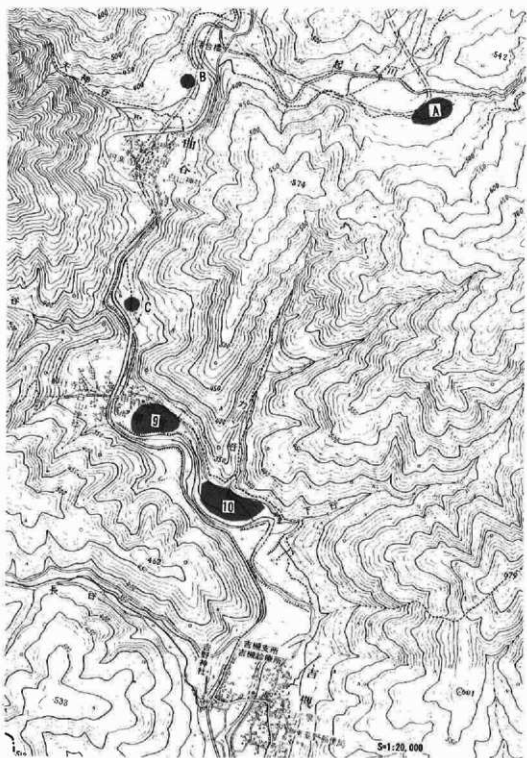
図 版 目 次

I. 起し又遺跡（第2次）・ムカイラ遺跡・大平遺跡	
図版1 起し又調査区遠景・試掘トレンチ	
図版2 ムカイラ調査区遠景・試掘トレンチ	
図版3 大平調査区遠景・試掘トレンチ	
II. 長尾寺遺跡（後谷墓地）	
図版4 長尾寺遺跡遠景・後谷墓地	
図版5 盗堀坑・作業風景	
図版6 遺物出土状況	

I. 伊吹町曲谷 起し又遺跡（第2次）

ムカイラ遺跡

伊吹町甲賀 大平遺跡



第1図 調査地周辺図(1)

A. 起し又遺跡 B. ムカイラ遺跡 C. 大平遺跡
 9. 大カイト遺跡 10. カン谷遺跡

1. 調査の経過

本章では、平成4年度には場整備事業にさきがけておこなった3つの遺跡について、関連性があるのでまとめて取り上げることにする。

起し又遺跡は、縄文時代の遺跡として周知されている。

ここでは、古くから土器が出土したという話が地元には伝わっていた。平成3年度に実施した町内遺跡分布調査において、字「起し又」の水田中から縄文時代中期あるいは後期の土器片を採集した。そこで、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条の6第1項の規定により、文化庁長官に「遺跡発見通知」を提出した。

平成3年度は、当遺跡が所属する東草野学区において、地表面採集を中心とする遺跡分布調査をおこなっており、この報告書でとりあげるムカイラ遺跡・大平遺跡も、上のような経過で、同様に遺跡として周知するところとなった。ただし、ムカイラ遺跡・大平遺跡については、採集した土器が細片であったために時代決定は不可能であった。そこで、今回の調査が期待された。

今般、団体営土地改良総合整備事業が、曲谷・甲賀地区内で計画され、この3つの遺跡で事前に確認調査（試掘）の必要性が生じた。

起し又遺跡で調査をおこなったのは、字「起し又」の西側で、起し又川が形成した段丘が再び狭くなったところの下起し又工区である。当遺跡では、今年度、姉川ダム建設に関連する県道山東本巢線付替工事に伴い、一部で発掘調査をおこなっており、今回の調査区はその下手にあたり、遺跡の範囲を確認する目的でおこなった。現地調査は、平成4年10月13日から15日までである。

ムカイラ遺跡においては、団体営土地改良総合整備事業に先がけて、その正確な範囲と内容を把握するために、県所有地を県当局の理解と協力を得て調査地とし、10月19日に調査をおこなった。

大平遺跡は、10月21日から23日にかけて調査を実施した。

2. 位置と環境

伊吹町は滋賀県の北東端に位置する。南は郡を同じくする山東町、西は東浅井郡浅井町、北から東にかけては伊吹山地が県境となり、北から岐阜県揖斐郡坂内村、同郡春日村、不破郡関ヶ原町に接する。

町域は、北中部が伊吹山地と姉川のつくる河谷部からなり、南部は伊吹山（標高1,377

m) から派生する弥高川、政所川・藤子川などによって形成された、いくつかの扇状地からなっている。

3つの遺跡が所属する曲谷・甲賀の集落は、町域北部の姉川が形成した谷底平野にあり、大平遺跡が立地する伊吹山地から張り出した舌状台地を境に、北が曲谷集落、南が甲賀集落となっている。曲谷から約6km遡ると、町最北の集落・甲津原にいたり、そこから、新穂・品又の両峠を越えて、美濃国(岐阜県)に通じる。また、甲賀から約1.5km下ると、大字吉槻にいたり、かつては、ここから七曲峠を越えて浅井町鍛冶屋に入り、湖北の中心都市、長浜などへ通じる道が主要道であったが、今日では、姉川沿いに下って伊吹町春照に入るのが一般的である。

自然環境は、日本海側気候区北陸型に属すといわれ気温が低く降水量が多いうえ、特に冬期の積雪量が多いことがその特徴とされている。

起し又遺跡は、姉川の支流・起し又川が形成した河岸段丘上に立地している。標高は420m前後をはかる。今年度おこなった発掘調査では、縄文時代早期の穂谷式土器や中期・後期の土器が出土した。

ムカイラ遺跡は、姉川右岸の河岸段丘に立地している。字名は「ムカイラ」で、向平と書くようである。この段丘は南北約140m×東西約80mで、周辺では比較的大きなものである。支流起し又川が本流姉川に合流する位置にあり、縄文遺跡の存在が予想される。標高は350m前後である。

大平遺跡は、大字甲賀字「大平」および大字曲谷字「安場」に所在している。伊吹山地から張り出した尾根に挟まれた谷地形の段丘で、南北約140m×東西約80mをはかる、ムカイラの段丘と比べて標高差があり、地形的にまとまったイメージはない。ここでは、字「安場」において縄文土器の出土が、一部地元で伝えられているようである。地表面採集で、土師器の皿と思われる口縁部を採集している。標高は約340m前後である。

周辺の遺跡には、大字甲賀字「大カイト」に所在する大カイト遺跡や、同じく字「カン谷」に所在するカン谷遺跡があり、平安時代と思われる須恵器や土師器を採集したが、詳細は不明である。その他、姉川源流部の甲津原から峡谷が平野部になる伊吹までの段丘上には、縄文時代の長谷遺跡(上板並)・伊吹遺跡(小泉)や、平安時代以降の山岳寺院長尾寺跡(大久保)や、中世の峯堂遺跡(小泉)などの主要遺跡が分布している。

3. 調査の概要

(1) 起し又遺跡

調査は、ほ場整備事業によって切土工事と排水路工事の計画されている個所を対象として、18カ所の試掘トレンチ（約2m×3m）を設定して、遺構や遺物の有無を確認した。調査の方法は、0.4㎡級バックホーを用いた表土掘削の後、一部人力により精査をおこない、順次写真撮影をおこなった。

調査の結果、すべてのトレンチから遺構、遺物を検出することはできなかった。土層の基本層序は、25cmくらいの耕土をめくると、ほとんどのトレンチで角礫を多く含む砂礫土層が現れた。また、トレンチ11・12では、1m弱下げると純粋な川砂が現れた。現在の川面（約380m）より約15m高いことになる。また、数箇所のトレンチから1m大の花崗岩が出土した。このあたりから北は花崗岩層となっており、往時はこの花崗岩を利用して石臼などの石材加工が曲谷集落でおこなわれていた。起し又川の上流サナギ谷には、いまま石材を切り出した遺跡が残っている。

当初予想していた集落跡はより山手の方に位置していたと考えられる。

(2) ムカイラ遺跡

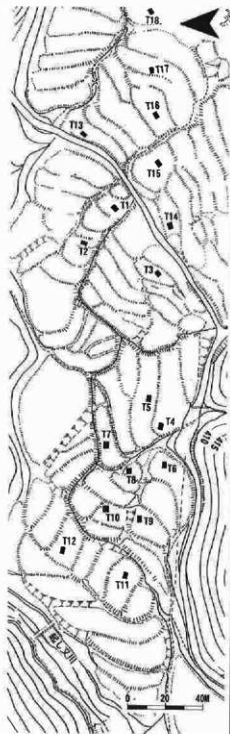
遺跡の外縁になると考えられる県所有地を調査地として、遺跡の範囲確認と内容の把握を目的として10カ所のトレンチ（約2m×3m）を設定した。

調査の結果、トレンチ1～7では20cmくらいの耕土をめくると、黒色系の粘質土層（黒墨土）が約30～80cmの深さで検出された。この中でトレンチ6と7で土器片が混じっていたが、伴う遺構はなくごくわずかの細片であったため調査に至らなかった。しかし当地域では、今後はほ場整備事業が計画されているため改めて確認調査をする必要を感じる。また、トレンチ8～10では3層目に明茶色の川砂が50cm以上堆積している。

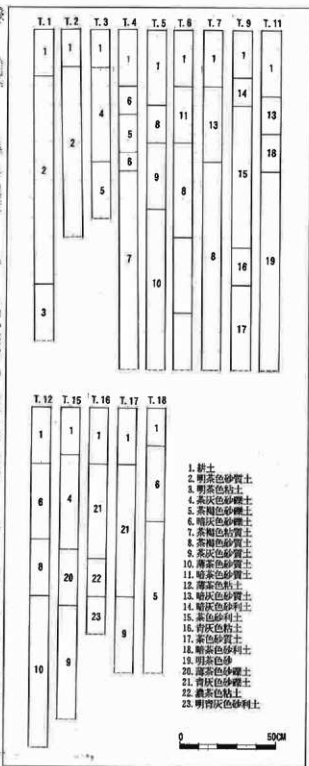
(3) 大平遺跡

調査は、ほ場整備事業によって切土工事と排水路工事の計画されている個所を対象として、17カ所の試掘トレンチ（約2m×3m）を設定して、遺構や遺物の有無を確認した。調査の方法は、0.4㎡級バックホーを用いた表土掘削の後、一部人力により精査をおこない、順次写真撮影をおこなった。

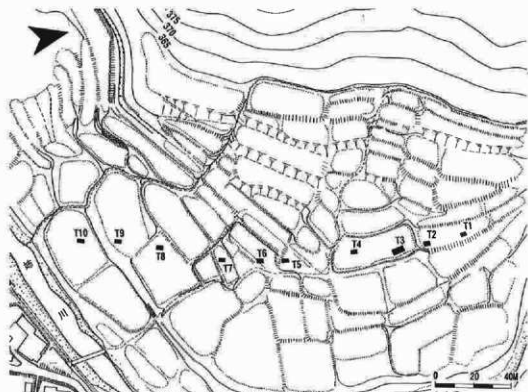
調査の結果、すべてのトレンチから遺構、遺物を検出することはできなかった。土層の基本層序は、20cmくらいの耕土をめくると多くのトレンチで山からの崩土と考えられる砂礫層が現れた。トレンチ17では約40cm掘り下げたところで川砂の層が現れ、現在の川面より9mちかく高い。



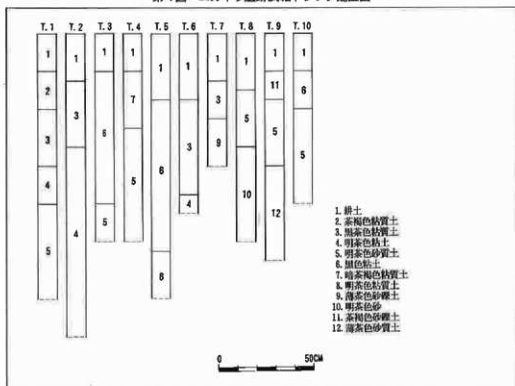
第2図 起し又遺跡
試堀トレンチ配置図



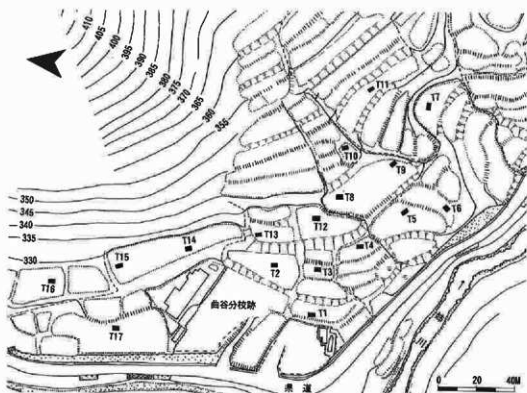
第3図 起し又遺跡試堀トレンチ土層柱状図



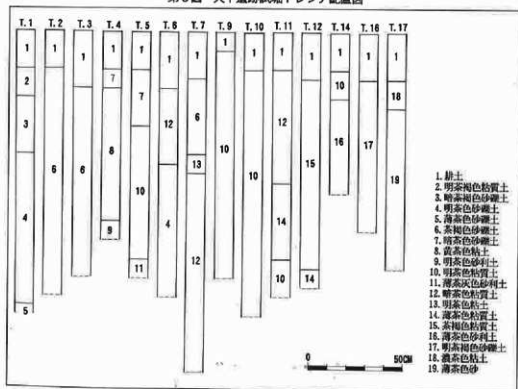
第4図 ムカイラ遺跡試掘トレンチ配置図



第5図 ムカイラ遺跡試掘トレンチ土層柱状図



第6図 大平遺跡試掘トレンチ配置図



第7図 大平遺跡試掘トレンチ土層柱状図

4. おわりに

曲谷区や甲賀区が属する東草野学区内の埋蔵文化財調査は、町南部の伊吹・春照両学区内の調査に比べて遅れている観がある。実際、『滋賀県遺跡地図』（平成2年度）に記載されている東草野学区の遺跡は、甲津原の治山遺跡と吉槻の七廻り峠遺跡という些跡のみであった、その後、『伊吹町内遺跡分布調査報告書』（平成3年度）で9カ所の遺跡を追加した。

実際に発掘調査された遺跡は起し又遺跡のみであるが、ここからは町内で最も古い時期の土器である縄文時代早期穂谷式土器が出土している。また、当遺跡が本格的に営まれた時期は縄文時代中期初頭の船元Ⅰ式からと考えられ、町域南部の伊吹山麓に展開する遺跡群に先行している。当遺跡は、後期中葉ころに終わっているが、姉川の上流部（東草野学区）に起し又遺跡のみが単独に存在していたとは考えにくく、時期や規模を違えて、周辺の段丘上に集落が形成された可能性は充分考えられる。

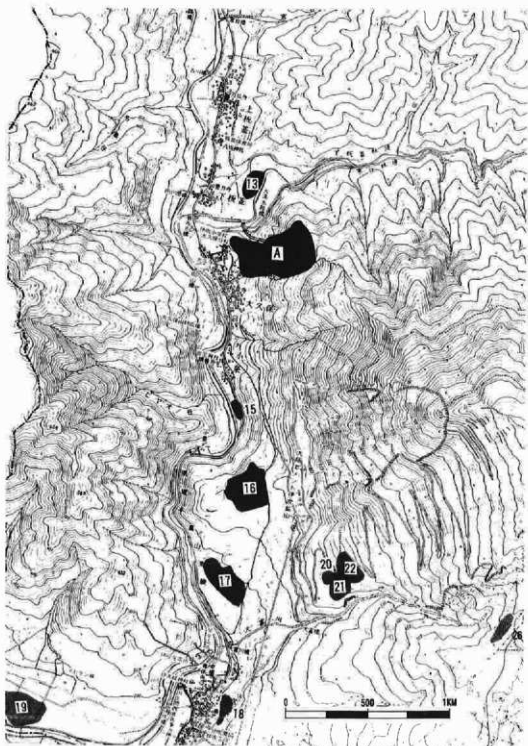
また、大平遺跡の南の段丘には古墳らしきマウンドがあり、次の段丘では平安時代に属すると思われる土器片を採集していることから、縄文時代以外の遺跡の存在も考えられる。

今回の調査は、これらのことを念頭において実施したが、なんらみるべき成果を得ることができなかった。今後の課題としたい。

〈参考文献〉

- 1992『伊吹町内遺跡分布調査報告書』 伊吹町教育委員会
1993『起し又遺跡発掘調査報告書』 伊吹町教育委員会

II. 長尾寺遺跡（後谷墓地）



第8圖 調査地周辺図(2)

A. 尻尾寺遺跡 13. 長谷遺跡 15. 小泉遺跡
 16. 峯堂遺跡 17. 伊吹遺跡 18. 伊吹城跡
 19. 岩ノ上遺跡 20-21. 太平寺遺跡 22. 太平寺城跡

1. 調査の経過

長尾寺遺跡は、伊吹町大字大久保字「上ノ山」「中森」「東川原」に所在する山岳寺院遺跡である。

長尾寺は、伊吹山の西あるいは南に延びる尾根上にある弥高護国寺・太平護国寺・観音護国寺とともに俗に伊吹四カ寺と呼ばれる。平成元年度からおこなった測量調査では、60以上の大小の坊跡を確認した。^① この調査結果に基づき、平成4年9月1日付けで伊吹町指定史跡となった。^②

遺跡は3本の尾根上に立地しており、過去にたびたび自然災害を受けている。とくに今回調査をおこなった後谷と呼ばれる地域はその爪跡をはっきりと残し、谷部が深くえぐり取られている。また、尾根上に所在する後谷基地は昭和56年を中心に陶磁器目当ての組織的な盗掘を受け、40カ所におよぶ盗掘坑とばらばらになった石塔や石仏が無残に散乱していたという。翌年地元有志によりこれらを仮安置する作業がおこなわれたが、現在もおお盗掘坑が口を開けたままである。

今回、文化庁と滋賀県教育委員会の指導と補助を受けて、盗掘の後始末と基地の性格の把握を目的に発掘調査を実施した。現地調査は平成4年11月25日から12月24日におこない、追加調査を平成5年3月17日から22日にかけておこなった。現在出土遺物の整理中であり、今回は調査の概要のみを述べ、後日、本報告をおこなう予定である。

2. 位置と環境

伊吹山(1,377m)は、近江盆地のほぼ全域からその雄大な姿を望むことができる。特に全山が雪でおおわれた冬の山容を見ると、古代から靈山、神の住む山として畏れ敬われてきたことがうなずける。伊吹山は本町のシンボルであり、現在まで山麓に住むものはみなこの山から恩恵を受けて生活を営んできた。

本町の位置、地形、気象等についてはIを参照していただきたい。また、伊吹山寺の歴史については諸先学の研究があるので割愛したい。^③ ここでは、大久保集落の環境、長尾寺の概要、遺跡の現状等について概要を述べる。

大久保集落は町域の中部、姉川左岸の河岸段丘上に立地している。姉川の中流域は二段の河岸段丘が発達しており、4つの集落がこの段丘上に並んで立地している。この河岸段丘は特に大久保付近で最も発達しており、集落内に高さ20m前後の断層がある。大久保集落の背後には伊吹山が迫り、前面には姉川が流れ、対岸は七尾山(669m)となっている。

集落の北には板名古川が伊吹山地から流れだしここで姉川に合流する。昭和31年に3村合併がなされるまで永くこの川が郡境になっており、北が東浅井郡、大久保より南が坂田郡に属していた。

長尾寺跡は、この断層を下端とする伊吹山の尾根上にある。遺跡は約240～325m付近に所在している。中心の尾根には扇状に坊跡群が展開している。ここには、長尾寺の塔頭であった惣持寺が法灯を守っている。また「大進坊」、「北の坊」、「池の坊」などの伝承地名が残る。北側の尾根上には、今回調査した墓地をはじめ、鐘楼跡などの伝承地がある。南側の尾根には伝「車堂」のほか数箇所坊跡が所在している。遺跡の現状はほとんどが山林で、集落に近い所は畑地や宅地になっている。遺構の残りは良好で、地元では「大久保の史跡を守る会」が結成され、史跡の保護・顕彰に積極的に取り組んでおられる。

3. 調査の概要

今回の調査は、北側の尾根上にある通称「後谷墓地」でおこなった。この尾根と中心の尾根の間の後谷は伊勢湾台風で壊滅的な崩壊をおこし、現在では切り立った深い谷となっているが、以前はわりとゆるやかで、遺跡の中心部から簡単に渡る道があったという。墓地は標高約290m付近にあり、幅約30mの谷を挟んで南側の尾根上にも通称「南墓地」がある。

調査区は、後谷墓地の谷側に等高線と直交して2カ所を設定した。2カ所とも盗掘坑があり、組合式の五輪塔残欠がのぞいていた。調査は人力で遺構面まで掘り下げ、遺構・遺物の検出をおこない、順次図化と写真撮影を進めた。

出土した遺物は、陶器・磁器・素焼きの皿・北宋銭・釘・炭・骨片・組合式五輪塔残欠・一石五輪塔・宝篋印塔基礎・石仏などであった。

調査区1（トレンチ1）

この調査区は山側に設定した東西約7.8m×南北約4.5mの不定形の調査区である。厚さ約20～60cmの腐植土および第1層をめくると、東側上方では固い茶色の粘質土が現れた。第1層は上方からの流土と盗掘による攪乱土と考えられる。茶色粘質土は上方からの自然地形がゆるやかになる元の地表面と考えられる。ここからは3基の小型の組合式五輪塔の基礎、宝珠・請花2、笠2を検出した。この基礎は水平がやや不安定ではあるものの原位置を保っているものと思われる。3基はほぼ同じ方位を指している。このうち1基の周囲には約10～40cm大の平たくて角の丸い石が同じ高さでおかれている。これも原位置を保っ

ているようで五輪塔の安置方法を知ることができる。このような石は遺跡周辺の山中にはなく五輪塔安置の際に麓の川より運び上げてきたものだろう。一番西の基礎から約1m下がったところで直径・深さ約10cmの人骨の集積があったが、3基の基礎には下部施設等は検出されなかった。

この調査区の西端下方は、第1層の下に茶褐色砂質土の落ちこみがあり、ここから多量の組合式五輪塔の宝珠・請花、笠、塔身、基礎や、陶器片が出土した。この層は盗掘以前の攪乱層と考えられる。出土遺物は投棄または落ち込んだものであろう。

調査区2（トレンチ2）

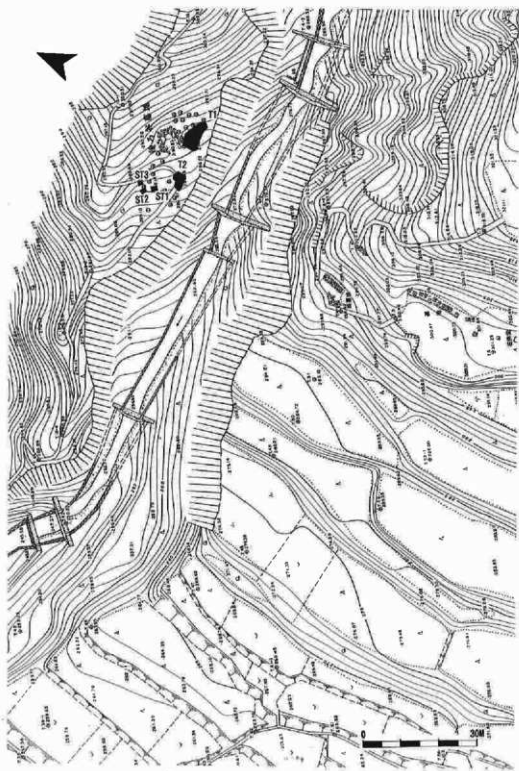
調査区1から約6.5m下った谷際に設定したトレンチで、東西約5m×南北約2mの長方形をなす。東側上方に幅1.5mほどの盗掘坑が開いており、宝珠・請花が1点のぞいていた。盗掘坑を広げていくとさらに11点の宝珠・請花と笠1点・石仏1点がまとまって出土した。昭和56年の盗掘時の際のもと考えられる。

この調査区の土層は第1層の礫や木炭の混在した攪乱層のみで、茶色粘質土が現れる。この攪乱層に多く含まれている木炭は、後谷基地の中央部にある幅約4m奥行き約5mの炭焼き窯跡の稼働時に廃棄されたものと考えられる。この窯の年代や使用者については地元でも確認できず、古い時期のものと思われる。第1層に限らず、基地の相当部分が窯構築時に攪乱を受けているものと考えられる。昭和56年の盗掘時に散乱していた石塔・石仏類が地元の方の手でこの窯跡に整然と安置されている。

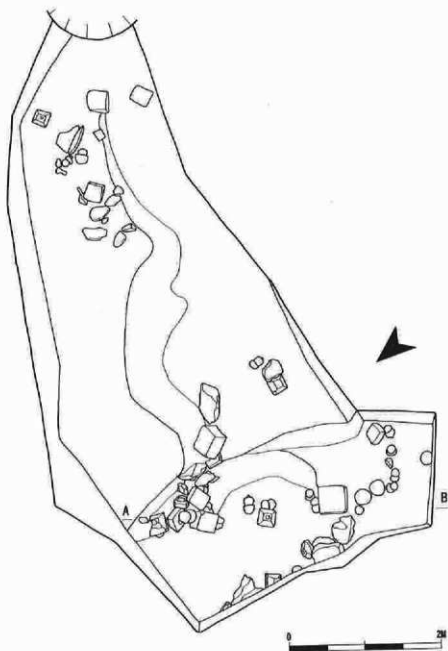
トレンチの中央部付近で組合式五輪塔の宝珠・請花3、請花1、笠1、基礎2、一石五輪塔1、宝篋印塔基礎1点と陶器片、素焼きの皿片が少量出土している。

試掘トレンチ（ST1～3）

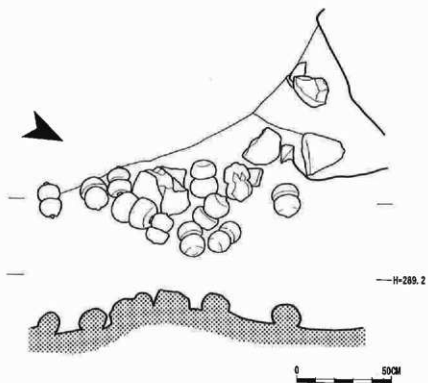
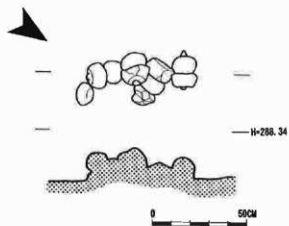
窯跡の北西に1m四方の試掘トレンチを3つ設定した。谷側のみの調査であったので、尾根側の斜面のあり方を把握する目的で掘り下げたが、遺構・遺物は検出されなかった。土層の堆積はST1が表土・茶色粘質土、ST2と3が表土・茶色土の下に約10～20cmの細かい砂利が堆積している。



第9図 調査トレンチ配置図



第10図 トレンチ1平面図



第11図 トレンチ2遺物出土状況

4. おわりに

今回の調査では、調査地の多くの部分が攪乱されているようであったが、トレンチ1において一部原位置を保っていると考えられる遺構が検出できた。

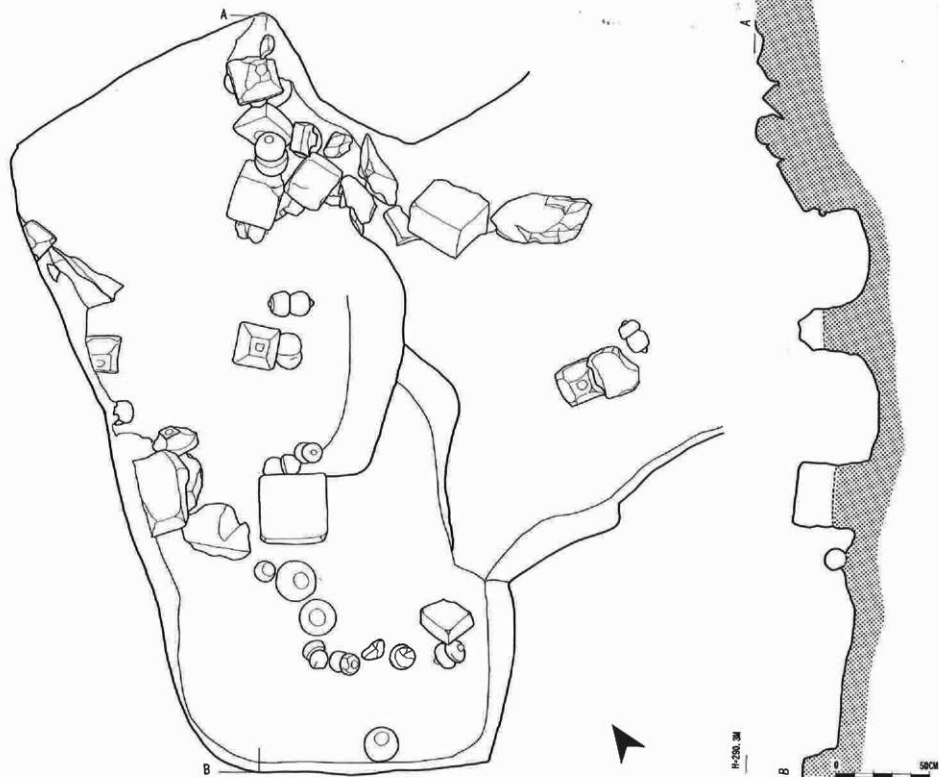
出土遺物については現在整理中であるので詳細には報告できないが、後谷墓地の造営年代を考える上で重要な遺物があるので、まとめに代えて簡単にふれておきたい。

トレンチ2から出土した宝篋印塔の基礎は、一辺約45cmをはかり、格狭間を持つもので、町内曲谷産の花崗岩でできたものである。同規模の基礎が曲谷白山神社境内にあり鎌倉後期から南北朝期のものと推定されている。^④ 今回出土した基礎もおそらく同時期と考えてよいのではないだろうか。

このことは今まで出土品や石塔などから室町時代中期頃と考えられていた当墓地の造営年代が、鎌倉時代末期まで遡る可能性があることを示している。今後さらに詳細な調査をおこない確かなものとしたい。

(註)

- 1 高橋剛之 1992 『長尾寺遺跡測量調査報告書』伊吹町教育委員会
- 2 伊吹四カ寺のうち、大字弥高所在の弥高寺跡は昭和61年3月28日に滋賀県指定史跡となった。太平寺跡は、伊吹山中腹の旧太平寺集落に存在していたと考えられている。観音寺は、13世紀に現在の山更町朝日に移ったと伝えられているが、元の位置は不明である。
- 3 坂田郡教育会編 1914 『改訂近江國坂田郡志』
宇野茂樹 1976 「伊吹山寺」(『柴田實先生古稀記念日本史論叢』)
伊吹町教育委員会 1977 『伊吹山寺』
用田政晴 1986 『弥高寺跡調査速報』伊吹町教育委員会
- 4 曲谷の石造物については、『伊吹町内遺跡分布調査報告書』(1992)



第12図 トレンチ1 遺物出土状況

图 版



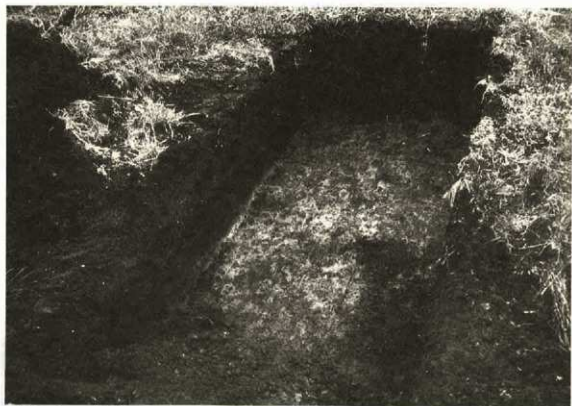
起し又調査区遠景



試験トレンチ (T.3)



ムカイラ調査区遠景



試堀トレンチ (T. 6)



大平調査区遠景



試掘トレンチ(T.17)



長尾寺遺跡遠景



後谷墓地



盜糖坑



作業風景



遺物出土状況



遺物出土状況

伊吹町文化財調査報告書第7集

伊吹町内遺跡調査概報 I

1993年 3月

編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会

印刷 垂井日之出印刷

